発達支援リーフレット

相談・訪問・支援会議・研修会などのシーンでしばしば話題になるテーマのヒント集

今般、療育コーディネーターが、電話・メール・来所等で相談を受けたり、学校・園等に訪問したりした際に、しばしば話題になるテーマについて、課題解決のヒントとなるような情報を、図やイラストなどの視覚的情報を添えて端的にまとめ、リーフレットにしました。

これらのリーフレットは、子どもの発達にかかわる保健・子育て・保育・教育・医療・福祉などの分野で、日々子どもと接して生活したり支援に当たったりしている皆様（保護者、支援者、園・学校・施設職員等）に、簡便な形で情報提供することを目的としています。

従いまして、必ずしも専門的な知識がなくとも、一般的な知識に基づいて理解しやすいように、図やイラストや説明文の表現を工夫しながら、作成いたしました。無償で配布・提供させていただくものですので、お気軽にご活用いただければ幸いです。

No.	タイトル （サブタイトル）	主な内容 （キーワード）	対象年齢 （年代）
①	コミュニケーション発達を見守る ～三項関係成立のプロセスをたどって～	二項関係　濃厚な二項関係 うっすら三項関係　三項関係 パラレルトーク　指さしトーク	０～３歳 乳幼児期
②	ことばの相談に見る状態像から ～就学前後の子どもの発音・発話について～	幼児語的な発音　晩熟型 こもったような発音　不器用型 話す・聞く等の困難　吃音	４～８歳 就学前後
③	行動を変えるための鍵を見出す ～環境→考え方→行動の波及を想定して～	「信・頼」関係　トロッコモデル 支点・力点・作用点　てこモデル 心的バリアフリー　可視化	３～１８歳 幼児期～青年期
④	こだわりの向こうに未来を描く ～意識の転換から個性の伸長を目指して～	泥沼モデル　本当の願い　遊び場 逃げ場　受け流す・切り替える まっとうな心根　よた話・あす話	３～１８歳 幼児期～青年期
⑤	心の決めたままに我が道を ～意思決定を支えるやり取りを通して～	眼ざし・手ざし・指さし　AAC 意思疎通支援　意思のベクトル 約束を守るための支援のサイクル	３～１８歳 幼児期～青年期
⑥	肯定的自己像が人生の道しるべ ～自分探しの旅路に生きがいを求めて～	ＩＣＦ　環境因子　個人因子 ライフスタイルの形成　人生設計 悪行・無業・正業　社会資源	１０～１８歳 思春期・青年期
⑦	好循環の原動力となる意欲の源 ～かかわりの中で癒され満たされる体験～	意欲→成功→自信　悪循環　好循環 保養(癒される)　充足(満たされる) 生活環境を超えた非日常世界	０～１８歳 乳幼児期～青年期

これらのリーフレットは、紙文書、または、電子ファイル（PDFファイル）で提供させていただきます。コピー・印刷による複製、及び、配布は、ご自由にしていただいてけっこうですが、原則として、表紙下部の執筆者・連絡先はそのままで、ご利用いただきますようお願いいたします。

児童発達支援センター
にじいろキッズらいふ HP

事業案内 ＞ 児童発達相談センター/サービス内容 ＞ 療育コーディネーターより
ダウンロード 可

コピーOK

【問い合わせ・連絡先】

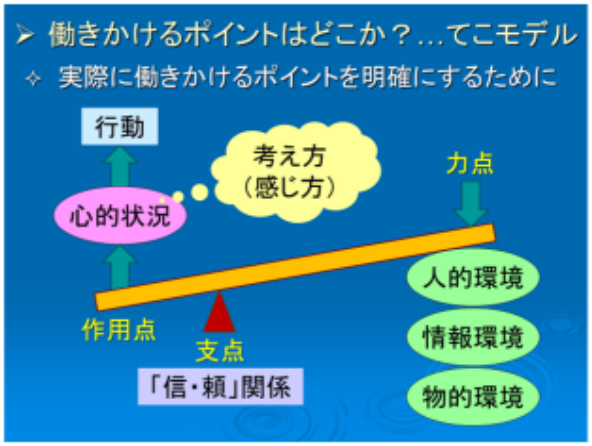
長野圏域療育コーディネーター／言語聴覚士
安川 健治

〒380-0928　長野県長野市若里 6-6-14
児童発達支援センター にじいろキッズらいふ

TEL　026-219-3781　業務携帯　080-8877-1709
E-mail　k-yasukawa@nagano-shajikyo.or.jp

1. キーパーソンとは、子どもにとって、役に立ってくれると感じられる「いい人」で、言い換えれば、頼れる大人。
2. キーパーソンは、その子どもがまっとうな心根を持っていることを理解した上で、「いい子」だと信じられる大人でもある。
3. キーパーソンである大人と子どもとの関係は、信ずる者と頼る者という関係で、「信・頼」関係と言うことができる。
4. 両者の関係は、メリットを提供する者とされる者という関係で、対等ではなく、大人の側の、「お手並み拝見」という余裕も大事。

➢ 谷を隔てた二つ山という距離感と両者の高低差を、橋を下る「トロッコ」で表している。



1. 子どもの「行動」を変えるためには、それを引き起こしている「考え方」、更には、そのもとになっている「環境」を変える必要があり、その点こそが働きかける「力点」となる。
2. 支援者は、子どもの身近な環境に働きかけることで、間接的に「考え方」変え、それによって、「行動」を変えることを目指す。
3. こうして、「環境→考え方→行動」という形で、影響力の波及が生ずるように、環境を整備することが、「できる状況づくり」となる。
4. そして、子どもの人的環境・情報環境・物的環境の整備を通して、心的状況を整えていく。

➢ このように、直接働きかけるべきは環境であることを、「てこ」の力点として表している。

※「③行動を変えるための鍵を見出す～環境→考え方→行動の波及を想定して～」の2・3ページより。

➢ ひとことに「こだわり」と言っても、いろいろな場面で、いろいろな形を取って、表現されます。上のイラストは、しばしば見られる行動の例です。

➢ 「こだわり」行動の最中、子どもの表情を見ると、へらへら笑っている場合もありますが、あまり楽しそうでなく、むしろ苦しそうな場合が多くあります。

➢ 子どもの本当の願いに沿った行動というよりも、不安から逃れるために、暇つぶし、かりそめの遊び場、逃げ場として、機能している場合が多いようです。

➢ 「こだわり」行動が繰り返される場合、そこには持続させている要因があり、それは、往々にして身近な大人の反応です。

➢ 身近な大人が、叱責・禁止*など強く反応すると、本人の混乱を招いたり、逆にご褒美になったりして、どちらにしても、「こだわり」行動をかえって強めてしまうことになります。

＊ 叱責・禁止や強い口調の指示・命令ではなく、「～します。」と、するべきことを、終止形で端的かつ冷静に伝えることは有効です。

➢ 子どもの「こだわり」行動を、身近な大人が何とかなくそうと躍起になると、かえって強めてしまうので、「こだわりにこだわらない」ことが極意です。

➢ 「こだわり」を減らそうとする「マイナス」の考え方ではなく、子どもにとって充実したよい時間を増やすという「プラス」の考え方こそが大事です。

➢ 「こだわり」行動そのものに対しては、つっぱってきたのをつっぱり返すのではなく、「暖簾に腕押し」、「柳に風」といった調子で、「受け流す*」ことが得策です。

➢ その上で、「こだわり」の考え方から解放され「いいこと」を考えられるように、次のページに示すような、考え方を「切り替える」のによい話題へと誘い、意識の転換を図りましょう。

＊ 「受け流す」ときには、肯定や共感ではなく、まして拒否でもなく、中立的に「そうだね～」というように、平板で横に流れるような語調で応ずることが有効です。また、悪態に対しては、子どものまっとうな心根を信じて、「また心にもないことを」と応じます。

※「④こだわりの向こうに未来を描く～意識の転換から個性の伸長を目指して～」の2・3ページより。

☞ 児童発達支援センター にじいろキッズらいふ HP
https://nagano-shajikyo.or.jp/n-k-life/services/sodan